

忘却された「交流誌」の空白を埋める書

広範な一次史料の精査からは、この時代ならではの豊かな人間関係の交錯が浮かび上がる

稲賀繁美

南明日香 著

国境を越えた日本美術史

ジャポニスムからジャポノロジーへの交流誌1880-1920

2・26刊 A5判400頁 本体5500円

藤原書店



振り返れば、今からはや三十五年前。パリ大学都市日本館、通称「陸奥屋敷」の改装が成ったばかりの一九八一年。評者はその寄宿生という身分で、週末土曜日の午前には図書館に日参した。古色蒼然たるガラス張りの書庫を開くと、未知の古書籍が次々と姿を現した。『藝術の日本』(Le Japon artistique) 三十六巻(三冊)合本)には、世紀末の日本画商で編者のS・ドングによる自筆署名が見える。寄贈先の「パリ仏日協会」は仏文の「年報」(1903-34)を刊行していたが、その不揃いの残部も、地下倉庫に乱雑な山となって放擲されていた。百年に達する歴史の堆積の中には「亭山」と漢字の印章を刻んだ小ぶりの『日本美術書』(Notes sur l'art japonais (1905-06)) 上十一巻も含まれていた。高価な写真版などは含まぬ質素な造本だが、上巻の絵画・版画から下巻の彫刻や金工まで、流派の系図が巻末に詳細に図示され、異彩を放っていた様が、克明に記憶に残る。著者Marquis de Tressant(トレスサン)侯爵遺族のみならず、パリのギメ美術館から東北大学のミュンスタールク(下至太郎)の尽力による購入と推測され、大戦直後の欧州事情を照らし出す。軍人や企業経営者をも含む好事家たちが専門家に伍して学術に貢献でき、時に論争を招きながら

振られる。さらに特定の学術分野がひとたび確立すれば、それは学術史の批判的回顧として検証や顕彰の対象となる。だがその両者の移行期は見落とされがちだ。十九世紀後半の欧州での日本美術発見は、Ponsonetと呼ばれ、二十世紀の二十年代以降、極東学院における学術研究「Le Japon artistique」や「ponologie」へと継承発展をみる。だが日露戦争終結(1905)の時点から第一次世界大戦終結(1918)に至る十五年ほどが、いままでの学問的検証からは落ち零れてきた。南明日香氏の新著は、ド・トレスサンを中心に、その周囲の日本愛好家第二三世代に照準を合わせ、オスカール・ミュンスタール、ラファエル・ペトリュッチ、アンリ・ド・ジョリに肉薄して「忘却された『交流誌』の空白を埋める」。

もはや学術的には過去の事績と評される好事家による骨董漁りの足跡。それを再発掘するのは、労多き地道な作業だが、ひとつ舵取りを間違えば、それ自体好事家的な骨董趣味に陥りかねない。だがトレスサン侯爵遺族のみならず、パリのギメ美術館から東北大学のミュンスタールク(下至太郎)の尽力による購入と推測され、大戦直後の欧州事情を照らし出す。軍人や企業経営者をも含む好事家たちが専門家に伍して学術に貢献でき、時に論争を招きながら

も情報の授受に動かし、そのうした文化環境が、画家の山下新太郎や、秋山久作といった錫杖の權威まで巻き込んだ、大戦勃発直前まで世界的な規模で展開していた。瀟々然と一がながら編集主幹を務めた『國華』の英語版や、彼の英文による山水画論『Three Essays on Oriental Painting (1910)』、そこに含まれた「林泉高致」の部分訳が、欧州における東洋絵画研究に先駆的な視点や文獻的眺望を提示し、東洋美術への開眼を準備していたことも裏付けられる。また田島忠一の審美書院による『審美大觀』(Selected Relics of Japanese Art 二十巻(1909-1000))や『東洋美術大鑑』(Selected Masterpieces from the Fine Arts of the Far East 十五巻(1900-1900))が、原色木板複製やコロタイプ版によって当時の欧米に衝撃を与えていた。その真価は、近年複製映像メディア史による研究により、再評価の対象となりつつある。

こうした複製図版や売り立て目録を通して日本美術研究に動じた軍人トレスサンだが、その位置づけはどうか。東洋美術史言説の構築を問い直す問題意識は、近年内外の研究者の間で急速に高まりつつあり、本書もこの文脈に貢献している。トレスサンの用いるkokoro ochi や sorogaoなどの用語は、日本で久保田米庵や島田雷潮・墨仙などに師事したHenry P. Boweの英文による『日本絵画』(1911)に由来する。北米での前衛美術開眼

の契機となった兵器展(1911)を報じたA・J・エディも「立体派と後期印象派」(1914)で、出典脱落のまま、ブイの同書に依拠して、東洋画通りを開陳している。評者は辛亥革命直後のこの時期に、応用美術中心の日本趣味から水墨画重視の東洋美術・哲学への移行期を想定している。刀剣の鐔に熱中したトレスサンは、世紀末の日本人画商・林忠正の見立てに疑義を呈する一方、金家一族に代表される洗ひ鉄鐔の職人技のうち、水墨山水画の精神性、「伝神」の発露をも見定める。第一次世界大戦初期に三十八歳で戦死した侯爵は、時代精神の推移を、その一身に見事に具現していたことになる。著者の死により未公開に終わった鐔研究の集大成は、この時代の墓碑と化する。

二〇一三年のセンター試験の国語の問題には、小林秀雄の随筆「鐔」(1962)が出題された。だが、受験生には「鐔」ナルモノを理解させるには、注釈に図解を加えねばならなかった、という。はたして「鐔」を選んだ出題が時代錯誤だったのか、それとも「鐔」の復権こそが今日的課題なのか。日本国内では、一握りの好事家を除けば、美の壺からも無視される鐔。だがそれは根付と並んで、海外では根強い人気を誇っている。この落差と逆転現象は何を意味しているのか。トレスサン没後一世紀、「鐔」の文化史再考は今、齎である。(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学)